

幸運を持ち歩くバッタ

南第三小学校 六年

下嶽 しもだけ 皇愷 こうせい

ある日、ニュースで黄色のバッタが確認されたそう。「ふーん」と心でつぶやきながら学校に行く途中でいわかんを感じて、ふとうしろをふり向くと、黄色のバッタがついてきていた。あまりにめずらしかったことなので、そのバッタをつれて家へ走った。昔お父さんがつかっていた虫かごをそうじし、そのバッタを飼育することにした。そしてエサをあたえ、大切に育てて初めてだつぴをした。うれしく思っていると、だつぴのからにきらしたものがあり、何だろうとよくみると、何と、金粉だったのだ！ これを見ておどろいた自分は、「えっ」と思わず声に出してしまった。このことを友達にいうとあつというまに世間に噂が広まってしまった。このせいで、バッタがねらわれてしまった。なんとかくし通さないと思いつながら、いつもバッタをそばに持ち歩くことにした。何とか学校からも協力してもらうことに成功した。そして、かくしながら大切に育て、二回目のだつぴが始まった。自分は心の中で「がんばれ！」と応援するように見届けた。そしてだつぴが終わり、今度は、イエローサファイヤと呼ばれる宝石を僕に受け取ってほしように差し伸べてきた。そしてだんだん色がかがやいてきた。そこでインターホンがなって、出てみると、とびらの前は取材者がたっていた。そして、「このようなものです。どうぞよろしくお願いします。」と名刺を差し伸べてきた。その名刺を受け取ると、「黄色のバッタがいるときいてやってきました。失礼ですが家に上がってもよろしいでしょうか？」と聞いてきた。ぼくはバッタがねらわれていると思い、「人ちがいじゃないですか？」とごまかした。そして、取材者が「そうでしたか。大変失礼いたしました。」ともうしわけなさそうに帰っていた。ほっと安心すると、バッタがだつぴをしようとしていた。

しかし、なぜかバッタがだつぴをしようとしなない。なぜだろうとよくみると虫かごにカマキリが張りついていてた。ぼくはカマキリを追いはらおうとしたらかまれてしまった。ぼくはいたいのをガマンして外においだすことに成功した。そしてバッタがだつぴを始めるとぼくは安心した。そして、だつぴは成功した。やっぱり前より体の表面がかがやいてきている。そして、ここである変化に気づいた。バッタが日本語に近い鳴き声でなっていた。そして、しばらくして、とうとう最後のだつぴが始まった。そしてだつぴが終わって、羽化がはじまった。そして、羽化が終わった。そして、ぼくに語りかけてきた。「ねがいをつかなえてやろう」と言った。ぼくはこの世界の平和をねがった。そしてバッタはまぶし

ことばらんど賞
下嶽皇惺「幸運を持ち歩くバツタ」

くかがやき、小さなちようになつてきえた。そして、黄金のバツタはまたこの世界のどこかで、新しい飼い主をまつている。

審査員講評

宝物のような黄色いバツタと出会い、その後さまざまピンチを切り抜ける展開が楽しかったです。直接的には書かれていないバツタとの絆も、登場人物たちのふるまいから豊かに想像することができます。バツタが「小さなちよう」になるというラストも天才的な発想だと思いました。

—— 藤岡 みなみ